

# (一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第84号 (2016年9月26日)

## 定例研究会のご案内

次回第 274 回定例研究会の日時や内容等は未定です。決まりましたらあらためてご案内を差し上げます。

\* \* \* \* \*

## 定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第 273 回定例研究会

日 時 : 2016 年 7 月 30 日 (土) 13:30~17:00

場 所 : 同志社女子大学今出川キャンパス

ジェームズ館 2 階 J 2 0 5 教室

例会担当 : 仲万美子 (同志社女子大学)

劉麟玉 (奈良教育大学)

## 《特別講演》

京都でまなぶ、理解する日本芸能の意味

—トラディショナル・シアター・トレーニングの活動を事例に

マシュー・ショアーズ (ケンブリッジ大学)

コメンテーター：井口淳子 (大阪音楽大学)

## 〈要旨と報告〉

今回の例会は、米国、オーストラリア出身の日本学研究者による講演を組み合わせたもので、お二人の活動根拠地ともいえる京都で開催された。

まず一人目の登壇者、マシュー・ショアーズ Matthew Shores氏 (ケンブリッジ大学、アジア中東学部、日本文学助教授) による講演は、上方落語を研究するとともに、自ら噺家として活動してこられた経験に基づくものであった。米国の小さな町に生まれ育ち、やがて日本学を志し、日本の伝統舞台芸術、とくに上方落語を研究テーマとすることになった経緯や、修行のなかでの印象的なエピソードをもりこんだ講演は「いかにして私は落語研究者、上方落語家になったのか」という半生記ともいえる内容であった。大学院時代の恩師や師匠の桂文枝 (5世) ら噺家たちの口吻が生き生きとよみがえるのもマシュー氏ならではの語り口であった。

コメンテーター (井口) は、まず落語という話芸が、中国に類似のジャンルが見当たらない希有なジャンルであることを指摘した上で、質問のかたちをとりつつ、上方落語に関わる諸問題について氏の考えをうかがうことを試みた。たとえば、日本の伝統芸能を修得するにあたって、今日では、日本人だから、外国人だからといった差異はないのではないかという質問である。これは私自身が日本伝統音楽を前にして感じているハードルの高さ、日本人の音楽性が欧米人のそれと、同質になりつつあることを日々痛感する体験によって発せられた質問であった。この質問については、マシュー氏は、落語の理解が海外 (英語圏) でどこまで可能なのか、という「文化の翻訳」の問題に焦点をあて、詳しく現状を説明された。すでに海外で広がりつつある英語による落語、あるいは字

幕付きの日本語落語について「海外に落語をどう見せるべきか？」という問題は簡単に答えが出るものではない。フロアーからも英語による落語や、映像付きの落語上演の可能性についての質問が相次いだ。もちろん、その背景には江戸時代の庶民の生活を題材にした落語が日本人にすら理解しにくいという現状がある。氏は結論を慎重に避けつつも、米国などで英語落語は受け入れられているものの、あくまでも日本語による落語を尊重すること、そこに英語や多言語字幕を付ける方法を支持されているように受けとめられた。

重要ないくつかの指摘も講演後に披露された。たとえば、「台本」というものの捉え方についてである。上方落語では東京と異なり噺の文字化や全集化が非常に遅れたこと、噺家の自宅に全集はあってもそれは置いてあるだけであり、弟子は師匠の「よし！」という一言の許可を得るまでひたすら口頭のみ伝授に励むことになる。録音やメモも許されないという伝統は現代でも生きているという。そして最後に、上方落語の特徴として音楽（寄席囃子）の重要性が指摘された。はなしは即興的な改変が許されるが、囃子の挿入箇所は不変であり、それゆえに囃子方がもつ優位性が保たれている、ある時代、囃子方が噺家よりも地位が高かったのだ、という指摘については今後、実証研究の深化がのぞまれよう。

講演では堅い雰囲気をもとっていた氏が、コメンテーターやフロアーからの質問に答えるにあたっては、徐々に噺家を思わせる表情や口調に変化していくのを興味深く拝見した。当意即妙に受け答えをされる氏に噺家としての高い資質を感じつつ、われわれは伝統芸能の研究と実践が一体となったみごとな実例を目の当たりにしているとの印象がすくなく残る講演であった。

(井口 淳子 記)

\* \* \* \* \*

## 《田邊尚雄賞受賞記念講演》

“Japanese Singer of Tales” 執筆を通して見えてきた日本の語り物、  
世界の語り物

時田アリソン (京都市立芸術大学)

コメンテーター：竹内有一 (京都市立芸術大学)

### 〈要旨と報告〉

当学会の学会賞に相当する田邊尚雄賞の受賞記念講演を、支部の例会企画として行うのは、おそらく初めての試みであろう。受賞者が西日本支部の会員だから、という理由に留まらず、田邊賞の運営方法にも一石を投じる意義があると思う。というのも、学会としては、秋の大会での同賞授賞式において、受賞者のために立派な式典を設けているが、受賞者の発言はごく短い時間に限られている。同じく大会懇親会での田邊賞祝賀会においては、受賞者のトークコーナーを設ける慣例があるが、酒肴が進んだ場でのことなので、固い話より裏話的な雑談に花が咲く。また、大会開催地から遠距離の会員にあっては、諸事情で大会に参加できない場合が多いので、受賞者の声が届きにくい。田邊賞の運営に関わる総務理事の一人として、このような進取的な例会企画が今後の学会運営に生かされていくことを切に望みたい。

さて、このたび田邊賞の栄に浴した講演者、時田アリソン氏は、日本に在住する海外出身の日本音楽研究者として、ずば抜けた実績を持つ一人として知られている。授賞理由は会報第97号に記載されているので、ここでは、今回の講演と著作を振り返って思いつくままに述べたい。まず、時田氏が日本の語り物音楽に留まらず、世界中の音楽をいかにたくさん聴いてきたのか、ということに改めて感じ入った。単なる聴き流しや楽しみでなく、真摯に前向きにあらゆる音楽と「実地」で向き合ってきた姿勢には、田邊尚雄・小泉文夫といった当学会の偉大な先学を想起させるようなパワーと説得力がある。それを裏付けるのが、氏の研究姿勢と理論づけの明晰さである。すなわち、私をはじめ多くの日本人研究者は、専門分野の個別研究にいそしみ、日本音楽を広い視野で追求したり、その全体像を捉えたりすることにまで力が及ばない、あるいは全体

像を捉えたつもりで捉えきれていないことが多いのだが、時田氏の研究姿勢は、いわゆる語り物音楽を物体として「対象」にするのではなく、それを一つの思考軸として、キーワードとして、適確に、しかも柔軟に捉え直すことにより、日本音楽の本質に迫ろうとしているように思われる。とくに「口頭語りの理論」として、語りの主体が「記憶し、演奏しながら、語りを作り上げる」「伝承の過程（練習）でも、演奏時（本番）でも、書かれたテキスト（本）に頼らない、しかし文字化されることが多い」「既成のシーン・セクション、決まり文句（歌詞）、決まったフレーズ（節、型）が構成上に不可欠」（注：講演者の意図をよりわかりやすく伝えるため、講演者がレジュメに記した文言を報告者が適宜改めて補った）と指摘されたことは、きわめて明晰で有用な理論づけといえよう。研究者のみならず、多くの実演家が実感でき得る理論づけになっていることが何よりも嬉しい。ジャンルごとの各論も充実し、たくさんの音楽ジャンルについて、各ジャンルの特徴を踏まえた適切な事例が要領よく収録される。採譜・歌詞（ローマ字・日本語・英訳）・付録のCD音源を駆使した学習的利用も可能。英語圏のみならず、多くの日本人にもぜひ手にして欲しい。

(竹内 有一 記)

\* \* \* \* \*

### 《総合討論》

ディスカッション：井口淳子

### 〈報告〉

マシュー・ショアーズ氏の上方落語についての講演とその後のディスカッションは、日本学研究の充実を十二分に示すものであった。コメンテーターとしてのレポートにも書いたが、研究と実践が見事に一体化し、

二つの領域を自由に軽やかに往き来する一人の研究者の姿をわれわれは目の当たりにすることになった。

二人目の登壇者、アリソン・時田氏の英語で著された大著、*Japanese Singer of Tales : Ten Centuries of Performed Narrative*は、女史の清元節に始まる日本の語り物研究の長い道のりの集大成である。その道のりがいかに困難なものであったか、また日本の語り物を、平家から浄瑠璃までの千年の歴史、ジャンル横断史の形でまとめる偉業をオーストラリア人研究者が遂行されたことは、まさに日本学研究の一つの到達点といえよう。二人の登壇者に対して、フロアーから制限時間を越えるまで活発に繰り出された質問やコメントが、お二人の研究への率直な評価と賞賛の証であったと思う。

時田アリソン氏の研究については、その研究マネジメント能力の高さについても私は感銘を受け続けてきた。1998年、国際日本文化研究センターで一年間開催された共同研究会はその成果を『日本の語り物 - 口頭性・構造・意義』(2002年)として刊行し、いわば今回の大著を予感させる報告書であった。共同研究会では、毎回のように、前半は通文化的に語り物、*Performed Narrative*を検討することにあてられ、アフリカ、アジアの語り物について、そのoralityとliteracyの問題や、口頭構成法(パリー・ロード理論)が日本の語り物にどこまで有効であるか等の諸問題が活発に論じられた。後半は日本の語り物音楽を専門とする研究者の分科会となり、各ジャンルで統一されていない音楽用語の問題等が検討されていたときく。当時から時田氏は通文化的視野で日本の語り物を捉えようとされており、同時に三味線音楽の音楽学的分析にもひとしくエネルギーを注がれていた。その後、浪花節や近代のアジア洋楽受容史にも研究対象を拡げ、いずれも共同研究や演奏実践をともなう成果発表などに、研究マネジメントの高い能力を発揮されている。単に一研究者として著書や論文を執筆するにとどまらず、広くオープンにプロジェクトを立ち上げ、研究者を集め、単独では果たせない大きなプロジェクトを実施する能力こそ、われわれが見習わねばならない姿勢かと思う。

時田氏の勤務校での取り組み、つまり伝統芸能や音楽のすそ野を広げる試みは、マシュー氏が京都で世界各国から参加者をあつめる伝統芸能トレーニング (Traditional Theatre Training) に毎年取り組まれていることにも通じる共通点をもつ。それは、伝統音楽、芸能のすそ野を広げる活動の対象はもはや日本人のみではなく、国境をこえて広く世界を対象とするべき、ということである。日本音楽、芸能は特殊な文化ではなく、それゆえ、その理解や修得の可能性は文化をこえて開かれているのだ、とする力強いメッセージをお二人から受け取ることができた例会であった。

(井口 淳子 記)

\* \* \* \* \*

## ■入会申し込み・住所変更について

(一社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、82円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等についても、下記の学会事務所へお知らせください。申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください!

一般社団法人 東洋音楽学会 学会事務所  
〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル307号室  
TEL 03-3832-5152, FAX 03-3832-5152  
ホームページ <http://tog.a.la9.jp/>

## ■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、FAX、E-mail)を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

東洋音楽学会 西日本支部事務局  
〒565-8511 吹田市万博記念公園 10-1  
国立民族学博物館 福岡研究室気付  
TEL 06-6878-8351, E-mail [fukuoka@idc.minpaku.ac.jp](mailto:fukuoka@idc.minpaku.ac.jp)

---

## 支部だより 第84号

発行：東洋音楽学会 西日本支部 担当：上野 暁子、出口 実紀  
〒565-8511 吹田市万博記念公園 10-1  
国立民族学博物館 福岡研究室気付  
TEL 06-6878-8351, E-mail [fukuoka@idc.minpaku.ac.jp](mailto:fukuoka@idc.minpaku.ac.jp)